

戦時下における児童向け紙芝居制作についての一考察 ——紙芝居『だるま船』を事例として

高塚 明恵

はじめに

昭和20年（1945）4月20日¹に発行された紙芝居『だるま船』は、現在確認されている限り紙芝居刊行会が制作した最後の紙芝居である。史上初の紙芝居専門出版社であった紙芝居刊行会は、昭和8年（1933）に今井よねによって設立され、主に子ども向けの伝道のために聖書物語やキリスト教の偉人たちの伝記を紙芝居に仕立てていたが、昭和16年（1941）から当時の時勢に影響され、国策を啓蒙するための紙芝居を制作するようになった²。キリスト教文学者で童話作家の小出正吾が脚本を担当した本作も国策に沿った内容となっている。本作は水上生活者の幼い兄弟を主人公にした物語であり、昭和15年（1940）に発表された小出正吾作童話「達磨船」を原作とし、小出自身によって紙芝居用に脚本を整えられている。

戦時下においてプロパガンダに利用された紙芝居の研究は従来、作品の収集や内容の紹介と制作意図などの分析、紙芝居制作に携わった人物たちの実践活動の解明について行われてきた³。近年、日本教育紙芝居協会の機関誌『教育紙芝居』『紙芝居』が復刻され⁴、神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センターの研究プロジェクトによって、14施設626作品1,029点を網羅する書誌目録が公開⁵されるなど、戦時下に制作された紙芝居に関する基礎的な文献やデータが提供され、この分野の研究は急速に進みつつある。

紙芝居は、国策宣伝に用いられるにあたりその対象を大人にまで拡充したことにより大きく発展した。しかし今井は、紙芝居はあくまでも子ども向けのものという意識を持っていた⁶。本論では、紙芝居刊行会によって児童向けに国策を啓蒙するために制作された紙芝居の一つである、紙芝居『だるま船』を具体例として、その制作過程を考察する。

1. 小出正吾と紙芝居制作——今井よねとの関わり

小出正吾の経歴については、根本正義が『小出正吾研究』⁷に昭和52年（1977）現在までの状況を詳細にまとめている。また昭和55年（1980）には自伝『童話から童話へ——ある児童文学者の回想録』⁸が出版され、会長を務めた日本児童文学者協会により没後に雑誌『日本児童文学』誌上で追悼特集⁹が組まれており、平成12年（2000）には全4巻からなる『小出正吾児童文学全集』も編まれているため、その生涯と作品については比較的よく知られていると言える。小出は、童話創作のほか聖書物語、絵本、伝記、翻訳、など多岐にわたる分野で仕事をしており、また雑誌の編集にも携わっているが、紙芝居については前述の根本論文に小出の童話を原作として戦後に出版された紙芝居数作品が載せられる¹⁰のみで、これまでほぼ言及されてこなかった。小出は自伝のほか、戦中から戦後にかけて自分の作品や半生に触れた文章をいくつか残している¹¹が、そのいずれでも戦前・戦中の紙芝居創作について触れていない。小出の作品研究でも、戦前・戦中の創作活動についての言及はある¹²ものの、紙芝居制作に触れたものは皆無である。

しかし小出は、紙芝居制作に無関係であったわけではない。紙芝居『だるま船』制作より以前、キリスト教において紙芝居が印刷され教育的利用が行われた草創期の作品である日本日曜学校協会が発行した紙芝居の制作に、今井とともに関わっているのである。ここでは、小出と今井の経歴を振り返りつつ二人の接点を探り、日本日曜学校協会によるキリスト教伝道紙芝居制作までの経緯を追ってみたい¹³。

小出正吾と今井よねはともに明治30年（1897）に生まれた。小出の生地は静岡県三島、実家は鉄砲火薬免許商を営む素封家であった。祖父はゼームス・バラ牧師を匿ったことが縁で、キリスト教へ入信、小出は生まれた時からクリスチヤンの家庭で育った。大正3年（1914）、上京して早稲田大学に入学。在京中は、大正11年（1922）に郷里に戻るまで、牛込の市ヶ谷教会に所属していた。

一方、三重県津市の材木商の家に生まれた今井は大正6年（1917）に東京女子高等師範学校（現お茶の水女子大学）に入学するために上京、在学中に信仰を得て大正7年（1918）に市ヶ谷教会で金井為一郎牧師により洗礼を受けている。このころ小出は市ヶ谷教会において執事や日曜学校の校長を務めており金井牧師とも懇意で、ここで今井と知遇を得たと考えられる。

大正7年（1918）、早稲田大学を卒業した小出は、南洋商会に就職。商社マンとして貿易業に携わり、約10ヶ月間インドネシアのジャワ島へ赴任した。この時に現地の自然や風俗、民話に触れた経験から後に「南洋もの」と呼ばれる作品の数々が生み出

された¹⁴。大正10年（1921）、南洋商会を退社して本格的な文学創作の道へ入り、翌年には処女作となる『聖フランシスと小さき兄弟』という少年少女向けの聖者物語を厚生閣より出版した。帰郷後も『六合雑誌』や『福音新報』などに、詩や短編小説、童話などを発表し、昭和2年（1927）に最初の童話短編集である『ろばの子』が出版された。昭和3年（1928）には明治学院中等部に職を得て再び上京、国語・作文・文法・聖書などの授業を受け持っていた。昭和5年（1930）に日本基督教会日曜学校局の主事を兼任し、雑誌『日曜学校の友』の主筆を務めた。さらに、聖書教科書や日曜学校史の編纂、日曜学校のカリキュラムの立案にも携わった。

そのころ今井もまた日曜学校を運営していた。大正12年（1923）、賀川豊彦との出会いから、児童教育に目覚めた今井は、関東大震災の救援活動、3年間のアメリカ留学を経て昭和6年（1931）に本所区林町（現墨田区立川）に居を構え、自宅に独立採算の教会を設立して日曜学校を開設したのである。そして、日曜学校に通ってくる子どもたちと街頭紙芝居を見たことがきっかけとなり、昭和7年（1932）より紙芝居を使用した布教活動を開始した。

昭和8年（1933）、日本日曜学校協会において今井の発案と推測される紙芝居伝道が決議され、紙芝居伝道団が発足し、同年中に5巻の紙芝居が制作された。そのうちの『波よ静まれ』『イエスさま降誕物語第二編』の二作品の脚本を今井が、『ヨキヒツジカヒ』（図1-1）の脚本を小出が担当している。この紙芝居は、サイズは十六切で謄写刷りの塗り絵式になっており、現在のように裏に次項の脚本が記された順送りの方式ではなく、脚本を印刷した別紙（図1-2）が添えられ、それを暗記して演じるように作られていた¹⁵。



図1-1 紙芝居『ヨキヒツジカヒ』
（倉敷市立短期大学所蔵）

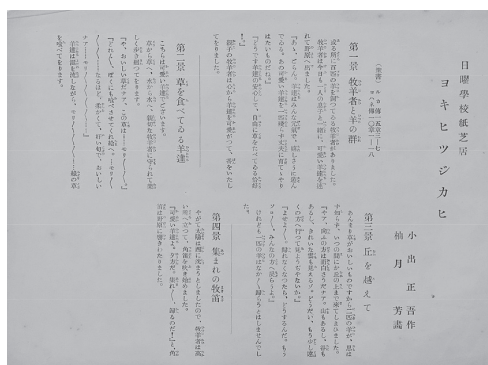


図1-2 『ヨキヒツジカヒ』脚本
（倉敷市立短期大学所蔵）

前述したように小出の自伝等でも紙芝居制作について触れられていないため、この時どのようないきさつから紙芝居の脚本を執筆することになったのかの詳細は明らかで

はないが、市ヶ谷教会時代に今井と面識があった可能性が高いこと、今井の師である賀川豊彦と明治学院を通じて繋がりがあったと思われる¹⁶こと、すでにキリスト教児童文学創作の実績があったことなどの事情から、キリスト教伝道のために紙芝居制作に関与することになったと考えられる。

その後、今井は紙芝居伝道をさらに発展させ、紙芝居を印刷発行するために紙芝居刊行会を立ち上げ、聖書物語などの紙芝居を福音紙芝居と称して制作、貸出・販売を始めるが、小出の紙芝居作品は、これ以後昭和20年（1945）の紙芝居『だるま船』に至るまで確認できず、『ヨキヒツジカヒ』後も継続して紙芝居制作に関わっていた形跡はない。昭和5年（1930）に街頭で平絵紙芝居が子どもたちに流行した当時、多くの教育者は紙芝居を子どもに悪影響を与える存在としていたが、山の手地域の中学で教職に就き、名門教会の日曜学校にも関わってきた小出には、紙芝居が今井ほど魅力的な教材には映らなかったのかもしれない。しかし、この時の経験が、後の『だるま船』制作への布石となったとも考えられる。紙芝居『だるま船』はなぜ制作されるに至ったのか、その背景に言及する前に、次章ではまず童話「だるま船」成立までをたどることにする。

表1 小出正吾・今井よね関係年表

和暦	西暦	小出正吾	今井よね
明治30年	1897	1月、静岡県三島に生まれる	11月、三重県津市一身田に生まれる
大正3年	1914	4月、早稲田大学商学部入学 三島教会から市ヶ谷教会へ転籍	
大正6年	1917		4月、東京女子高等師範学校入学
大正7年	1918	市ヶ谷教会で執事及び日曜学校の校長を務める 3月、早稲田大学卒業、南洋商会入社	2月、市ヶ谷教会で受洗
大正10年	1921	2月、インドネシアに赴任（10ヶ月間） 南洋商会退社、結婚	3月、東京女子高等師範学校卒業 4月、富山県滑川高等女学校で教職に就く
大正11年	1922	『聖フランシスと小さき兄弟』出版 三島に帰郷	
大正12年	1923	4月、三島教会独立	3月、富山へ講演で訪れた賀川豊彦に 出会い、師事
大正13年	1924		関東大震災救援のため本所へ、本所基 督教青年会へ参加
大正14年	1925		光の園保育所で保育に携わり、不良住 宅調査も担当する
昭和2年	1927		2月、横川尋常小学校訓導となる 12月、横浜港より米国留学へ出発

昭和3年	1928	4月、明治学院中等部で教職に就く	フィラデルフィア・ダンベルヒルの神学校で学ぶ
昭和5年	1930	日本基督教会日曜学校局主事、『日曜学校の友』主筆を務める。	
昭和6年	1931	童話作家協会へ入会	カナダで世界YMCA大会に出席し、その後帰国、本所区林町に教会を開き、日曜学校を行う
昭和7年	1932		街頭紙芝居を見て紙芝居伝道を決意、紙芝居『ダビデ』制作（原画）、路上で上演を始める
昭和8年	1933		1月、日本日曜学校協会で紙芝居伝道を決議、紙芝居伝道団設立
		紙芝居『ヨキヒツジカヒ』制作	紙芝居『波よ静まれ』・『イエスさま降誕物語第二編』制作
			紙芝居刊行会設立、紙芝居『少年ダビデ』など刊行
昭和9年	1934		『紙芝居の実際』出版、以後印刷紙芝居の制作を続ける
昭和10年	1935	明治学院高等部社会学科主任教授となる	
		社会実習で児童保護活動に関わる	
昭和15年	1940	8月、『日本だより』に童話「達磨船」を発表	
		12月、童話集『白い雀』出版	
昭和16年	1941	9月、童話集『だるま船』出版	
昭和17年	1942	2月、日本少国民文化協会文学部庶務理事となる	2月、日本少国民文化協会紙芝居部会参事となる
昭和19年	1944	集団疎開関係の業務に従事	6月、印刷紙芝居協議会へ参加
昭和20年	1945	紙芝居『だるま船』制作	紙芝居『だるま船』制作

2. 童話「だるま船」の成立

童話「だるま船」は、昭和15年（1940）8月に小出自身が主筆を務めた在米邦人及び日系人向け月刊誌『日本だより』に「達磨船」として掲載された後、昭和16年（1941）9月に清水書房より発行された短編童話集『小出正吾童話集 だるま船』（図2）において「だるま船」に改称して所収された¹⁷。



図2 『小出正吾童話集 だるま船』(個人蔵)

だるま船とは、貨物の運送に使用されていた大型のはしけ船である。積載量を増すために箱型にして帆も外したため自立航行できず、曳船と呼ばれる小型蒸気船に曳航されて移動する。航行において手も足も出ないことから、「だるま船」の名がついたとされる¹⁸。このような船を所有して各地を転々とする港湾労働者の中には、船の一部を住居化して水上生活を送る一家も多かった。昭和7年(1932)10月に東京都学務部社会課が行った調査によれば、東京水上警察の管内には6,826世帯、16,610人が水上で生活していた¹⁹。彼らは船頭・水夫・水上行商人等、水上労働者とその家族であり、多くが生業で使用する船舶に居住していた。仕事の都合によって頻繁に移動しなければならない水上生活者たちは、定住場所を持たず、行政が彼らの生活実態を把握することが困難であったため、適切な福祉支援が受けられず、労働環境や経済状態、住居である船舶の衛生面や安全面などに問題を抱えていた。とりわけ就学年齢にある子どもたちにとって毎日決まった時間に特定の学校に通学することは難しく、教育環境の課題は大きかった。水上生活者の就学対策としては、明治期から一部の篤志家などにより私学の創設や、公立校に特別学級を設けるなど支援の手が差し伸べられていたが、移動する船に住んでいながら毎日登校できる子どもはごく少数であった²⁰。そこで、昭和5年(1930)京橋区月島に通学児童のための寮を備えた小学校「東京水上尋常小学校」(以下水上学校)が開設されたのである。

童話「だるま船」の舞台はこの水上学校であり、そこに通う兄弟と家族の絆と教師との触れ合いを描いている。童話集『だるま船』に集められた童話について、同書の「作者のことば」の中で小出は「即ち『金的』『だるま船』『小さな食卓』『一箱のマツチ』『隣りの人たち』までの五篇は、現在事變最中の子供生活を描いたものであり」²¹と記している。このうち「小さな食卓」は出征兵士家族の母子寮を舞台にしており、「隣りの人たち」は予備役大尉であった父親が招集され戦死するという物語である。これらの作品は「だるま船」とともに、戦時体制下にあつて恵まれない環境でも希望を失わず明るく生きる子どもたちを主人公にしている。

小出は昭和10年(1935)から明治学院高等部社会事業科(現明治学院大学社会学部)の主任教授となり、社会事業実習として学生とともに各種福祉施設の実地見学や事業支援を行っていた²²。小出は当時を次のように回想している。

小出は昭和10年(1935)から明治学院高等部社会事業科(現明治学院大学社会学部)の主任教授となり、社会事業実習として学生とともに各種福祉施設の実地見学や事業支援を行っていた²²。小出は当時を次のように回想している。

当時、社会は既に戦時体制下にあった。私学の経営は困難を極めたが、私にとって最も有意義だったのは、学生とともに出かける実習で各種福祉施設の実態に触れ得たことであった。それは救癪事業から少年院までに及ぶ実にさまざまな世界だったが、特に不遇な子どもたちの現状には胸を搏たれるものが多く、他日幾篇かの童話作品が、それらの環境を素材として生まれたのであった。²³

戦時中の私の作品には次第に戦時風景が多くなっていった。私はそれまでの十年間、社会事業科で児童保護問題に専念していたし、深川と中延に二つの学生セツルメントを経営して子どものグループ指導をしていたし、あらゆる児童福祉施設や不良環境を巡ってケースワークするのが仕事だったから、戦時下の下積み子どもたちのために彼ら自身の現場の姿を書かずにはいられなかった。

屑鉄掘りの『太あ坊』も、水上生活家族の『だるま船』も、母子ホームの『小さな食卓』も、戦争遺児の『隣りの人たち』も、みなそうだった。道具立てから見れば、どれも戦争参加作品といわれるであろう。しかし、私はそういう子どもたちの未来に少しでも光の夢を贈るほかはなかったのだ。²⁴

小出は、戦時体制下で児童福祉施設の現場に接し、目の当たりにした貧しい子どもたちの生活に心を打たれた。そしてかつて南洋での体験を作品に反映させたように、この経験からも貧しくともけなげに生きる子どもたちの物語をいくつも生み出した。「だるま船」もそうした童話の一つであった。それは、実際に不遇な環境下で生きる子どもたちの現実とは乖離していたかもしれないし、体制に逆らうことなく苦境から抜け出す具体的な手段を講じることにはならなかったと言えるが、一方で小出正吾という作家が持つ理想や良心や愛情から創出された物語であることも事実である。また、昭和16年（1941）10月には、やはり水上生活者の子どもを題材にした絵本『オフネノコドモたち』（図3）²⁵が正芽社より出版されている。絵本では幼児向けに、船に住む子どもたちの生活を七五調のリズミカルな文体と平易な言葉づかいで紹介しており、当時いかに小出が水上生活児童たちに心を寄せていたのかがうかがえる。



図3 『オフネノコドモたち』（国立国会図書館所蔵）

3. 童話「だるま船」と紙芝居『だるま船』の本文比較

童話「だるま船」と紙芝居『だるま船』は同じ物語であるが、文章は大きく変更されている。紙芝居『だるま船』制作の背景について探るために、ここでは童話と紙芝居の本文を比較し、その差異から小出が紙芝居化する際の工夫と、紙芝居『だるま船』に込められた制作者の意図を明らかにする。まず童話「だるま船」について、その梗概を紹介する。

梗概

小一郎と小二郎の兄弟は傳馬船で運送業を営む両親のもとに生まれた船の子どもたちであった。船の家は狭いが居心地よく片付いていて、必要なものはすべてそろい、猫も住んでいた。2 畳敷きの部屋は家族の楽しい食卓であり、温かい寢床であった。しかし父親の仕事によって居場所が定まらないため、小学5年生の小一郎と1年生の小二郎は普段は月島の水上学校で、両親と離れ寮生活を送っていた。はじめは揺れない寢床や、船にはない戸や障子が珍しくとまどったが、今では1年生の小二郎も学校での生活に慣れてきていた。子どもたちは、土曜日になると家船に帰り一晩家族と過ごせるため週末を楽しみにしていた。しかし、小一郎と小二郎は、この三週間家に帰っていなかった。彼らの両親は40トンの伝馬船から160トンの新造のだるま船に引っ越し、仕事が忙しくなったため兄弟を迎えにくることができなかったのである。そのため次の土曜日こそは帰宅がかない、両親や末の弟、猫の三毛と再会して新しい船も見られると大いに期待していた。その土曜日、ほかの子どもたちのもとには次々と自宅の場所を知らせる電話や迎えがある中、二人には何も連絡がない。不安になり涙ぐむ弟を兄小一郎はけなげに励ます。ついに母親から電話がかかってきたが、やはり急な仕事が入り迎えに行けない、学校の近くを通るので川岸まで出てくるようにという知らせであった。意気消沈する兄弟たちに教師の藤山は、家に帰れなくても新しい船や両親や弟の顔を一目見ることができる、と川岸へ促す。やがて隅田川の岸辺にやってきた三人の前に発動機船に曳かれて、だるま船隊が通り過ぎる。その最後の一艘が兄弟の家となる新造船であった。家族はつかの間の邂逅を果たし、夕日の中を去っていくだるま船を兄弟と藤山は万歳を叫びつつ見送るのであった。

原作である童話「だるま船」の文字数は、8,000字強であるが、紙芝居では4,000字程度と文字数が半減している²⁶。このため紙芝居では、水の上の家船と陸上の学校と

の生活の違いや、勝鬨橋付近で藤山先生と兄弟が語り合う場面、兄弟がすでに三週間家に帰ることができないでいるというくだりなど、いくつかの要素が省略されている。しかし、単純に物語を縮めただけではなく、違和感なく物語が進行し、紙芝居として上演できるように工夫されていることがわかる。以下、具体的に本文を引用しながら比較していく。なお、童話の初出となる『日本だより』に掲載された「達磨船」を確認できなかったため、童話版の引用には、清水書房刊の短編童話集『小出正吾童話集 だるま船』（初版）に所収された「だるま船」を使用する。

（１）セリフの増加

紙芝居では、童話よりもセリフの割合が多くなっている。例えば、小二郎は学校で描いた絵を家に持って帰って弟に見せようと考えているのであるが、原作では、すべて地の文で描写されているのに対し、同じ場面を紙芝居では、兄弟の会話で表現している。

童話	紙芝居
<p>小二郎は鞆を背負つてみました。鞆の中には、いつか芝浦で見學したアルゼンチナ丸の寫生や、埋立地の草つ原から海を眺めた月島の風景や、朝の魚市場の戦争のやうな光景などの畫が、幾枚も幾枚も入つてみました。小三郎にみせてやらうと思つたのです。</p> <p>_____</p> <p>この大きな隅田川こそ、小一郎小二郎の故郷です。この川の水へ小一郎は、赤ん坊の時から今までに、十二回も落つこちたことがあります。小二郎でさへも、八回も落ちたのでした。赤ん坊の頃など、紐で船に結びつけられてゐたお蔭で、幾度落ちても、引き上げられて來たのでした。</p>	<p>小二郎くんの荷物の中には畫が二枚入つてみました。それは赤ちゃんの小三郎くんへのお土産です。</p> <p>『やあ、これは藤山先生の顔の畫だなあ。まるで、おまんぢゅうのやうに、まん丸だ、よく描けたなあ。もう一枚のは何だい、この亀の子みたいのは』</p> <p>『小三郎が川へ落ちたところを、母ちゃんが紐をひつぱつてあげてゐる畫なのさ』</p> <p>『あはは…お前もよくこんな風にして、ひつぱりあげられたんでおぼえてるんだな』</p> <p>『兄ちゃんだって赤ん坊の時分から、十二度もおちたつてぢやないか』</p>

また童話と紙芝居では、持って帰る絵の枚数と内容も変わっている。紙芝居で登場している、兄弟が幼いころから何度も川に落ちているというエピソードは、原作でも採用されており、終盤の兄弟が、通り過ぎるだるま船を一目見るために川岸へやって

くるシーンで語られる。水上生活者の子どもが川に落ちることは実際よくあった²⁷ようで、当時の資料では生活上の改善点としても挙げられている。小出も水上生活者と接した際に聞いた話であるのかもしれない。物語全体は切り詰めながら、再編成することで印象的な部分は欠かさずに盛り込んでいるのである。

童話	紙芝居
お母さんは背中の小三郎に河岸の兄さん達を見せようとするやら、先生にお辞儀をするやら、二人の子供に何やら叫ぶやら、一度に一人で、てんてこ舞ひをしてゐるのです。	お母さんは、そのそばで、てんてこ舞ひをしながら、叫んでゐます。 『小二郎やあ！小一郎やあ！そら、小三郎や、見えたかい、兄ちゃんたちだよ…。先生様あ、ありがたうございます…何分ともよろしくお頼み申します…小二郎やあ、小一郎よう』

次に、船の上から川岸の子どもたちに母親が声をかける場面は、子どもたちの姿を川岸に見つけ、通り過ぎるわずかの時間に慌ただしく子どもたちに声をかける母親の姿が目につくような描写がされているが、紙芝居では母親のセリフを加え、童話よりもあえて文字数を増し、母親の喜びと狼狽の様子をより具体的にイメージできるように描いている。登場人物のユーモラスでコミカルな仕草が描かれるのは小出作品の特徴であるが²⁸、紙芝居でもセリフを用いて効果的に再現している。

(2) 場面の転換

紙芝居は、絵をめくることが物語が展開していくが、母親からの連絡を待っていて、ついに電話がかかってきた場面や、家族の乗っただるま船が上流から現れる場面などは、次の絵にめくって、場面転換をすることで劇的に演出している。

童話	紙芝居
鞆を背負った小二郎は泣き出しさうな顔をしていひました。もつともな話だ、とつい小一郎も思つたのです。するとその時、お饅頭のやうに丸い藤山先生が教員室の窓から顔をお出しになりました。 『小一郎君、そら、電話！電話！』	ふたり しょくろんしつ らう か 二人は職員室の廊下まで来て待つてゐました。 するとその時、ズリズリズリ……とベルが鳴りました。 (めくる) 『そら来た！おい小一郎くん！電話、電話！』

<p>水の上を四艘の達磨船が、發動機船にひかれてやつて来たのでした。</p> <p>『あれだー！あの一番お終ひのです。先生、新造船です！』</p> <p>小一郎も思はず背伸びをして叫びました。</p> <p>それはまだ木の香もしさうな程新しい大きな達磨船でした。わざー河岸に近くコースを取つてゐるらしく、すぐ目の前を真直ぐに、この達磨船隊は下つて行くのでした。四艘とも、カーキ色のシート（防水の雨覆布）で蔽はれた胴の間（船の真ん中の荷物を積む廣い所）には、よつぽど重い大きな物をつんでゐるらしく、舷も水に深くひたつてゐました。</p>	<p>いかにも重さうに、大きな荷物を防水布につつまながら、まっしぐらに進んで来る輸送船隊でありました。</p> <p>その最後の一艘。</p> <p>（めくる）</p> <p>それは確かに新造船。木の香も新しいだるま船です。</p>
---	--

（３）時勢の強調

昭和16年（1941）に童話集が出版された際、日本はすでに戦時下であり、その時勢は童話にも反映されているが、紙芝居ではより戦時色が強調されている。その特徴は冒頭、東京の河川と舟運の説明から表れる。

童話	紙芝居
<p>何しろ東京には、舟の通ふ川が六十九もあり、そこには五千五百艘の川船が、丁度陸の上のトラックのやうに荷物を積んで往つたり来たりしてゐるのです。その中で二十トンから八十トン位まで積む傳馬船といふのが二千三百艘、八十トンから二百トン位までも積む達磨船といふのが千六百艘ばかりもあります。</p>	<p>東京の川の上には荷物を運ぶお船がたくさんゐて、まるで陸上の貨物自動車のやうにいそがしく往つたり来たりしてゐます。</p> <p>小さいのは傳馬船、大きいのは達磨船ですが、これらのお船はポンポン蒸氣にひかれて、川から川へ、重い大きな貨物を運び、戦争のために大きなお仕事をしてゐるのであります。</p>

童話では、当時の河川流通の状況と船の種類について具体的な数字を出して解説しているのに対し、紙芝居では船が荷物を運んでいるのは「戦争のために大きなお仕事をしてゐる」と断定している。また童話で使用されていた「トラック」という単語は

「貨物自動車」に言い換えられている。

さらに母親から今回も迎えに行くことができないという電話を受けた後、落ち込む兄弟を藤山先生が励ます場面においては、童話でも「お國の御用」「事變のため」と時勢をうかがわせる言葉があるが、紙芝居ではさらに「戦争に大切な、急ぎのお荷物を運ぶ」とより直接的な表現をしている。

童話	紙芝居
お父さんのお仕事はね、やつぱりお國の御用らしいですねえ。どうもさうだらうと思つたんだが、お父さん達のお船は、きつと大切な荷物を輸送していraftしやるのですよ。これはとても大事なお仕事で、事變のためには一刻を争ふものなのです。さういふお仕事でなければ、お父さんが君達をこんなに長くお迎へに來ない筈がありませんね。	お父さんのお仕事はね、これはきつと、大急ぎのお國の御用らしいね。戦争に大切な、急ぎのお荷物を運ぶお役目なのだよ。さあかうしちやゐられない、すぐに河岸へいかう！河岸だ！河岸だ！

また、童話では優しく言い聞かせるような藤山先生の口調も、紙芝居では力強く言い切る形になっている。

このような直接的な戦時色は、二人の心理描写にも見ることができる。川岸から家族が乗る新しい船を見つけた時、童話では初めて見る新造のだるま船に感動し、誇らしさで胸がいっぱいになっている兄弟の様子が描かれるが、紙芝居では「お國のために」と二人の決意が表明されている。

童話	紙芝居
『お、おうー、おおうー』 と、夢中になつて、小二郎と小一郎は叫び合ひました。この素晴らしい達磨船が、自分達の家だとは！ 二人の兄弟は直ぐには口もきけませんでした。あれに一ぱいの帆をあげたら、どんなに見事なことでせう。それは、たしかに千石船です。	『お父さん、お母さん、僕たちはもう淋しくなんかありません。お國のためにどうか、しつかりやって下さい。僕たちもうんと勉強しますから！』

また、童話では陸と水上に分かれて数瞬の再会を果たし、夕日の中隅田川の河口へ向かって船が進んでいく情緒的な結末であるが、紙芝居は最後に「力一ぱい闘ひます

よー」という子どもたちの覚悟を付け加えている。

童話	紙芝居
<p>見る――間に達磨船隊は、はるか河口の方へ向つて過ぎ去りました。お父さんも、お母さんも、日の丸を握つた小三郎の姿も、豆のやうに小さくなつて行き、やがては夕焼の水の彼方の光の中へ消えてしまひました。</p>	<p>その神々^{かうがう}しい光^{ひかり}のかなたへ、やがてだるま船隊の影は、豆のやうに、小さく消えて行きます。</p> <p>『お父さんもお母さんも、戦^{いくさ}つてゐるのだ。小一郎だって小二郎だって力^{ちから}一ぱい闘ひますよー』</p>

(4) 地名の削除

童話では、兄弟の通う水上学校がある「月島」や「隅田川」「勝鬨橋」「向島」「小名木川」「銀座」など、具体的な地名が何度も登場する。これらは主に東京東部の河川を中心とした地域で水上生活者の生活圏である。しかし、紙芝居では、冒頭の「東京」以外具体的な地名は一切語られない。

以上のように、小出は物語全体の分量を縮小した上で、セリフを多用し効果的な場面転換を行うために、エピソードの構成を組換えるなど紙芝居化にあたって工夫を施していることがわかる。紙芝居制作には積極的に関わってこなかったと思われる小出であるが、紙芝居の特性をある程度理解していたと言えよう。そして紙芝居『だるま船』では童話以上に戦時体制下の社会生活が色濃く反映されており、子どもたちに時局下での覚悟を促す内容となっている。

4. 紙芝居『だるま船』制作の背景

紙芝居『だるま船』には表紙に「文部省選定」との表記がある(図4)。これは、この紙芝居は文部省が選び、出版されたということを示している。戦時下においては国策を宣伝する紙芝居の制作に様々な公的機関が関わっていたが、文部省が「選定」をしている紙芝居は、昭和19年(1944)以降に出版された作品に集中的に見られる²⁹。昭和19年(1944)の10月に発行された日本教育紙芝居協会の機関誌『紙芝居』第7巻第10号には、文部省文化課長原元助が「集團疎開學童の紙芝居教育」という文章を寄せている。

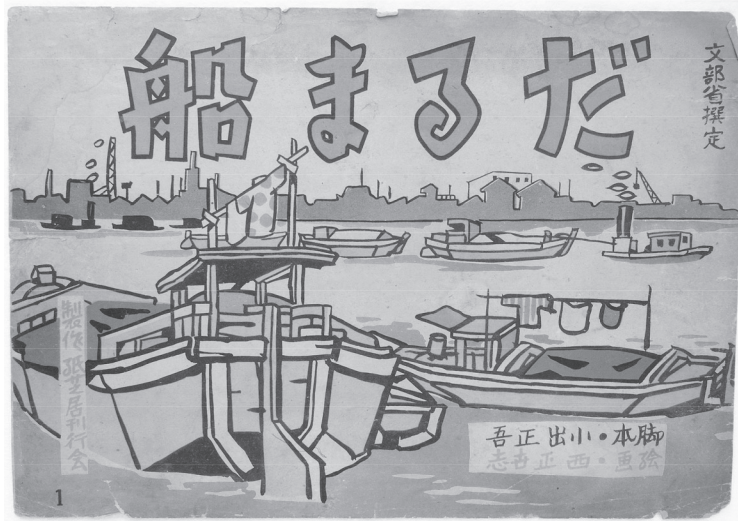


図4 『だるま船』(童心社所蔵)

集團疎開學童に對する文化施設の内容に就ては格別の注意を要するものであるから、原則として本省の推薦または検定にかゝるものを使用せしめることとしてゐるが、紙芝居に關しては現在のところかゝる制度が未だ存しなかつたので、このたび、新たに選定の方途を講ずることとした。即ち、集團疎開學童向き紙芝居製作の第一企畫として、毎月印刷紙芝居協議會に候補作品の提出を求め、そのうち約十種類を選定して、その製作配給の斡旋を行ふこととしたのである。³⁰

これによれば、集團疎開地において紙芝居を上演するために、文部省が「推薦」または「検定」をした作品を用いたが、紙芝居についてはこれまで該当する規定がなかったため、新しく「選定」の仕組みを整え、毎月候補作品の中から10作程度を「選定」することになったということになる。そして候補作品を提出するのは「印刷紙芝居協議會」であつた。印刷紙芝居協議會は昭和19年(1944)6月6日に、紙芝居独自の一元的指導統率機關を目指して結成された³¹。紙芝居刊行會も結成時より加盟しており、結成後3回にわたって開かれた会合に今井は毎回出席している³²。この印刷紙芝居協議會が最初に取り組んだ事業が、文部省の選定を錦の御旗として集團疎開兒童向けの紙芝居を制作することであつた。このような経緯から、当然今井の紙芝居刊行會も、集團疎開兒童向けの候補作品を提出することを求められ、それに応じて小出正吾の童話「だるま船」を原作とした紙芝居が企画されたのではないだろうか。

小出もまた子どもたちの集團疎開に無関係ではなかつた。昭和16年(1941)、すべての兒童文化活動の一元的統率機關として日本少國民文化協會が発足した。この組織

は文学部会・絵画部会・童話部会・玩具部会・生活用品部会・紙芝居部会・舞踊部会・出版部会・演劇部会・映画部会・蓄音機レコード部会の12部会に分かれており、小出は文学部会の庶務理事となり、童話文学を担当する第2分科に所属していた³³。昭和19年（1944）に入ると、小出はこの協会の主事として会の仕事に専従することになった。そして、「当面の急務はまず学童疎開の促進であった。大阪市学童集団疎開の計画はすでに着々進められていたのだったが、事態はもはや一日の猶予もなくなっていた。」³⁴という事情から、東京の児童たちの疎開促進事業に従事していた。

政府は、もともと都市住民に対して縁故疎開を推奨していたが、あまり効果が上がっていなかった。そこで学童の集団疎開が計画され、昭和19年（1944）6月30日に「学童疎開促進要綱」が閣議決定された³⁵。こうして児童の集団疎開は慌ただしく準備され全国の都市部に住む三学年以上の児童たちは夏ごろから順次農村部などに移動していったのである。小出は児童たちの移動が一段落した後は、疎開地への慰問隊派遣にも関わり、自ら疎開先を訪れることもあった³⁶。

『紙芝居』第7巻第9号には「第一期は実績を加味して各製作所に一―二本づつ割り当てとなつた」³⁷と集団疎开学童向け紙芝居選定の途中経過が報告されている。翌月の第10号には第一回の選定で決定した10作品が発表され、紙芝居『だるま船』も選定されている。

集團疎開學童用作品製作 文部省選定の集團疎開學童向き作品は左の10種が本極りとなつて選定を了へ、一日でも早く學寮に届けようと、大急行で製版印刷中である。「雛鷺の母」「お日様と悪魔鳥」（大日本）、「だるま船」（刊行會）、「仲間と共に」「子供の海」³⁸「楽しい集團疎開」（教育）、「雷撃」（全甲）、「臆病一番槍」「白虎隊」（東亞）、「鐵鯨戰記」（翼賛）。これらに要する用紙に就ては文部省が農商省當局と鋭意折衝して、特配を受けることとなつてゐる。³⁹

文部省選定作品が昭和19年（1944）以降に集中しているのは、この時に「選定」の制度が誕生したからであり、それは集団疎開児童という限定された対象に向けられたものであった。文部省はその後『集團疎開學童に對する読書指導と紙芝居利用の要領』⁴⁰という小冊子を制作し、34点からなる「學童向紙芝居目録」を掲載している⁴¹。目録中で「特に文部省に於いて疎开学童向として選定したものである。」として◎印がついた作品は、上記の記事中で紹介された10作品とほぼ重なっている。それ以外の紙芝居は既刊の作品から選ばれているようで、紙芝居刊行会からは昭和19年（1944）9月に出版された『手ニ手ヲツナゴ』⁴²が挙げられている。

表2 学童向紙芝居目録

題名	定価	発行所	*発行年月	*備考1 (書誌確認)	*備考2
◎ 雛鶯の母	未定	大日本画劇 株式会社	1944.11	全国調査	
◎ お日様と悪魔鳥	未定				
◎ 兵隊さんの臍	未定				
◎ つばめ組	未定				
母の翼	3.70		1944.3	全国調査	
一家こぞって	2.90				1944.3に広告あり
山の少年たち	2.90		1944.4	浅岡研究室	
皇国の子	2.90		1944.3	全国調査	
僕等のつとめ	3.70				
神兵と母	3.70		1944.9	全国調査	
今日よりは	2.90		1944.8	全国調査	
海は招く	2.90		1944.8	全国調査	
海の千人力	3.70		1944.8	全国調査	
富士は微笑む	3.70		1944.8	全国調査	
初陣	2.90		1944.4	全国調査	
桑と子供と兵隊	3.90		1944.4	浅岡研究室	
敵艦見ゆ	3.90		1944.5	全国調査	
◎ 仲間とともに	未定	日本教育画劇 株式会社			
◎ 子供の悔	未定		1944.11	全国調査	「悔」は「海」の誤り。 原作、小出正吾 作「クスモの花」
◎ たのしい集団疎開	未定				
父の手紙	2.80		1944.1	全国調査	
発明への道	3.00		1944.4	全国調査	
天降る神兵	2.60		1944.1	全国調査	
◎ だるま船	未定	紙芝居刊行会	1945.4	童心社	
手ニ手ヲツナゴ	4.00		1944.9	童心社	
◎ 鐵鯨船記	未定	翼賛文化画劇 協会			
◎ 盲導犬	未定		1944.4		
◎ 雷撃	未定	全甲社紙芝居 刊行会	1944.12	全国調査	
ブンブク茶釜	2.50		1942.7	全国調査	1944.4再版か
◎ 白虎隊	未定	東亜国策画劇 株式会社			
◎ 臆病一番槍	未定		1944.1	全国調査	
山本元帥	4.00				
北満の志士	4.25		1944.7		
北門の曙	3.20		1943.4	すみだ郷土文化 資料館	

*『集團疎開學童に對する読書指導と紙芝居利用の要領』をもとに作成した。

- * 「発行年月」「備考1」「備考2」の項目は執筆者が追加した。
- * 「備考1」は発行年を確認した資料の所蔵施設及び根拠となったデータベースを記載している。
- * 「備考1」の「全国調査」は、神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター「戦時下日本の大衆メディア」研究班編著『国策紙芝居からみる日本の戦争』所収の「戦時下紙芝居全国調査【暫定版】データ篇」を指す。「浅岡研究室」は白百合女子大学浅岡靖央教授研究室を指す。

集団学童疎開では、都市部の子どもたちが一斉に移動し、それまでと全く違う環境下で共同生活を強いられることになる。そのような状況の中で、家族と離れ離れの生活に前向きな覚悟を持つてのぞむ水上生活児童の物語は、集団疎開生活を送る子どもたちに相応しい紙芝居として制作されたと考えられる。童話「だるま船」が紙芝居化に際して、具体的な地名を排したのも、日本全国の子どもたちに配慮した結果であろう。水上生活という当時としても特殊な家庭環境から、教育を受けるために家族と離れて暮らす兄弟の物語が、都市部の大部分の子どもたちに当てはまる状況になっていたのである。

おわりに

小出正吾は、現実社会を舞台としその中に生きる子どもたちの夢や心を描こうとしてきた。童話「だるま船」も小出が社会福祉事業の中で実際に出会った水上生活児童の実態から生まれた物語である。その物語はやがて、今井よねとの縁から集団学童疎開児童のための紙芝居『だるま船』として翻案された。当時児童文化に関わっていた人々にとって「集団学童疎開」は大きな課題であった。日本少国民文化協会の機関誌『少国民文化』では、集団学童疎開の意義や、教育的効果などが盛んに議論されている。とりわけ紙芝居業界にとっては新しい活躍の場でもあった。紙芝居業界は子どもたちの疎開生活にとって紙芝居が有効な児童文化財であることを証明しようとしており、紙芝居『だるま船』は文部省の選定のもと「特配」を受けて制作された作品の一つであった。

戦時下、紙芝居は国策を広めるツールとして使用された。それらの紙芝居は戦意を高揚させ、人々を戦争に駆り立てる目的で制作されたが、戦地や兵士を題材とした作品だけでなく、国策の名のもとに貯蓄奨励や育児方法、食生活や労働態度など社会生活の隅々まで干渉するきわめて多様な作品が作られた。本論では、『だるま船』という紙芝居から、国策に沿った児童向け紙芝居が制作される過程の一例を明らかにした。戦時下における紙芝居制作の全容解明については、今後、作品やその主題、制作者及び公的機関との関わりなど、様々な切り口から分析が必要となろう。

注

- 1 紙芝居『だるま船』の書誌情報は、童心社所蔵資料から確認した。
- 2 今井よねの紙芝居活動についての研究としては、上地ちづ子「今井よねと福音紙芝居」(『児童文学研究』第20号、1988)、同「今井よねの出版紙芝居と紙芝居観」(『日本のキリスト教児童文学』国土社、1995)、高塚明恵「印刷紙芝居の黎明——今井よねによる紙芝居出版と発展」(『児童文学研究』第50号、2017) などがある。
- 3 櫻本富雄・今野敏彦『紙芝居と戦争 ——銃後の子どもたち』(マルジュ社、1985)、鈴木常勝『戦争の時代ですよ！ 若者たちと見る国策紙芝居の世界』(大修館書店、2009)、山本武利『紙芝居 街角のメディア』(歴史文化ライブラリー103、吉川弘文館、2000) など。
- 4 浅岡靖央編『雑誌『教育紙芝居』・『紙芝居』 ——1938～50年』全11巻、戦時期文化史料2、金沢文圃閣、2013～2014
- 5 神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター「戦時下日本の大衆メディア」研究班編著『国策紙芝居からみる日本の戦争』非文字資料研究叢書1、勉誠出版、2018
- 6 「紙芝居の方向性を語る ——企画陣の座談会」(『紙芝居』第7巻第8号、日本教育紙芝居協会、1944) の中で、今井は「子供にはいいですが、女の人には、それ程必要を感じません」と発言している。
- 7 根本正義『小出正吾研究』昭和52年度東京都教育研究助成金による論文、1977
- 8 小出正吾『童話から童話へ ——ある児童文学者の回想録』教文館、1980
- 9 「小出正吾追悼〈特集〉」『日本児童文学』第37巻第4号、日本児童文学者協会、1991
- 10 前掲7、29頁
- 11 「南方の思ひ出——ジャガタラ情調その他——」『文庫』第2巻第3号、三笠書房、1942、50頁
- 12 土屋忍「植民地をめぐる文学的表象の可能性：小出正吾・森三千代・西川満をめぐって」『アジア遊学』第167号、勉誠出版、2013、183頁
- 13 小出正吾の経歴は前掲7をもとに、今井よねの経歴は上地ちづ子「今井よねと福音紙芝居」及び、今井よね『紙芝居の実際』(基督教出版社、1934)をもとに執筆し、表1にまとめた。
- 14 前掲7、5頁
- 15 今井よね『紙芝居の実際』基督教出版社、1934、205頁

- 16 前掲8、273頁
- 17 前掲7、37頁
- 18 石井昭示『水上学校の昭和史：船で暮らす子どもたち』隅田川文庫、2004、54頁
- 19 東京府学務部社会課編『水上生活者の生活現状』社会調査資料第19輯、東京府学務部社会課、1933、2頁
- 20 前掲19、75頁
- 21 小出正吾「作者の言葉」『小出正吾童話集 だるま船』清水書房、1941
- 22 前掲8、285頁
- 23 前掲8、274頁
- 24 小出正吾「戦時下の児童文学——童話作家協会・日本少国民文化協会時代の回想」『日本児童文学』第17巻第12号、日本児童文学者協会、1971、28頁
- 25 小出正吾文、大石哲路絵『オフネノコドモタチ』正芽社、1941
- 26 童話、紙芝居ともに実資料より文字数を確認した。
- 27 前掲19、3頁
- 28 関英雄「評論・小出正吾童話論」『日本児童文学』第37巻第4号、日本児童文学者協会、1991、98頁
- 29 前掲5、423頁において、「文部省選定」紙芝居の出版年の偏りが指摘されている。
- 30 原元助「集團疎開學童の紙芝居教育」『紙芝居』第7巻第10号、日本教育紙芝居協会、1944、4頁
- 31 「本部だより」『紙芝居』第7巻第8号、日本教育紙芝居協会、1944、31頁
- 32 「中央の動き」『紙芝居』第7巻第7号、日本教育紙芝居協会、1944、30頁
- 33 『社団法人 日本少国民文化協会要覧』社団法人日本少国民文化協会、1943、39頁
- 34 前掲8、304頁
- 35 学童疎開実施の状況については、全国疎開学童連絡協議会編『学童疎開の記録』（大空社、1994）にまとめられている。
- 36 前掲8、305頁
- 37 「中央の動き」『紙芝居』第7巻第9号、日本教育紙芝居協会、1944、31頁
- 38 原作は小出正吾の童話「クスモの花」。
- 39 「中央の動き」『紙芝居』第7巻第10号、日本教育紙芝居協会、1944、30頁
- 40 文部省教学局『集團疎開學童に對する読書指導と紙芝居利用の要領』大日本教育会出版部、1945
- 41 前掲40、42～45頁をもとに、表2を作成した。
- 42 脚本・眞木三郎、絵画・西正世志『手ニ手ヲツナグ』紙芝居刊行会、1944。童心社所蔵資料より、書誌を確認した。